



Title	『若きヴェルターの悩み』改版は何を生んだか？
Author(s)	石原, 次郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 39(2), 49-79
Issue Date	1991-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33566
Type	departmental bulletin paper
File Information	39(2)_PL49-79.pdf



『若きヴェルターの悩み』改版は 何を生んだか？

石 原 次 郎

1787年に Göschen 版全集の第1巻として出版された „Die Leiden des jungen Werthers”¹⁾ (以下 WII と略記) が、今日ではもっともスタンダードな版の底本ということになっている。ドイツでも、標準的な全集や単行本の類が採用するのは、このいわゆる<決定版>であるし、翻訳市場でも事情はそう変わらないようである。1774年版の初版²⁾ (以下 WI と略記) と 1787 年の第2版の異同を主題にした論文もまた、驚くほど少ない³⁾。WI の形態を捨て去ろうとするこうした一般的な態度は、いかほどかは慎重な思慮の結果というよりも、むしろ単なる慣習、つまり作者の手になる最終決定稿をほとんど無条件に尊重するという、妙な芸術家崇拜のなせるわざとしか私には思えないふしがある。私がこの文章で述べようと思うのは、さしあたっては単純なことである。つまり、おもにふたつの版の „Der Herausgeber an den Leser“ を比較しながら、WII が WI に対して<決定稿>という地位にあるという判断を許すほど、果たしてふたつの版の差異は小さいものかどうか、言い換えれば、WI と WII とは、その基準がどんなものであれ、単純に優劣の判定を許すような同一の作品として扱われていいのかどうか、という点を洗い出してみたい。そこで、当然のことながら私は、とりあえずふたつの版に見られる異同を比較する作業にとりかかったが、もちろんこの単純作業から直接、ふたつの „Werther“ に対する何らかの評価基準が導き出せるはずはない。それにもかかわらず私は、芸術<研究>の分野では悪評の高い<評価>に踏み切ること躊躇しなかった。この<評価>に十分な説得力を持たせるのに必要なだけの膨大なディスクールは、私のなかではまだラプソディーめいた形しかとってはいないが、規範主義者と呼ばれるたちの悪い誤解も承知のうえ

で、私はここに、“Werther“の二つの版を比較するという形を借りて、ひとつの見方を提出するようにもつとめたつもりだ⁴⁾。

I.

最初に、WII だけにある次の個所を引用しよう。

..... „Ja, ja,“ sagte er zu sich selbst, mit heimlichem Zähneknirschen, „das ist der vertraute, freundliche, zärtliche, an allem teilnehmende Umgang, die ruhige, dauernde Treue! Sattigkeit ist's und Gleichgültigkeit! Zieht ihn nicht jedes elende Geschäft mehr an als die teure, köstliche Frau? Weiß er sein Glück zu schätzen? Weiß er sie zu achten, wie sie es verdient? Er hat sie, nun gut, er hat sie — Ich weiß das, wie ich was anders auch weiß, ich glaube an den Gedanken gewöhnt zu sein, er wird mich noch umbringen — Und hat denn die Freundschaft zu mir Stich gehalten? Sieht er nicht in meiner Anhänglichkeit an Lotten schon einen Eingriff in seine Rechte, in meiner Aufmerksamkeit für sie einen stillen Vorwurf? Ich weiß es wohl, ich fühl' es, er sieht mich ungern, er wünscht meine Entfernung, meine Gegenwart ist ihm beschwerlich.“ (HA94)⁵⁾

これは、“Werther“最後の部分である „Der Herausgeber an den Leser“ (以下 HL と略記) からの引用である。WII には、WI にはなかった書簡が新たに 11 通加えられているが、この HL の部分もまた、WI に比べて WII では約 1.5 倍にふくれ上がっており、異同も大きい。私はここで、引用された文章の言うところに触れるつもりはない。注目したいのは、ただ次の点だけである。 „Werther“はヴェルターの知人である「編者」が、ヴェルターの死後に彼の書簡を集めて報告するという体裁をとっている。HL にも当然その規則は働いており、ヴェルターの最期を伝えるこのドキュメントの部分もまた、彼を知る人々からの証言に負っていることになっている (HA 92)。引用された「独白」は、ロッテの父が病に倒れたという知らせを聞いたヴェルターが、徒歩でロッテのいる狩猟館へ向かう途中に発せられたものである。これは「編者」にとってはいささか都合の悪い点となる。ヴェルターはひとりで歩

いていった可能性が高いのだが、だとすると誰がこの「独白」を聞いていたのか。理由づけは何とでもできよう。ヴェルターには従者がいたのだ、とか、たまたま通りすがりの者がヴェルターの独り言を詳細に覚えていたのだとか、ヴェルターは後に知人にこの「独白」をそっくり伝えたのだ、とか。それでも疑いは晴れそうにない。「編者」が自分の能力を超えて、全知の作者になりおおせているように思われる。登場人物の心理に忍び込んで、それを記述するという、小説のテクニクが混入しているように見える。形式的な一貫性からの逸脱に美的な不快感を覚えるのは、今世紀の、しかも芸術の形式的な統一という要請に縛られた読者だけなのかもしれない。私も、なにもここに WII の形式的な不備を認めて責め立てるつもりはない。しかし少なくともここには、WII の HL に見られる特徴がよく表われている。WII の HL は、WI の HL に比べて、＜人物＞たちの＜心理＞描写をこと細かにおこなっている。ヴェルターの＜心理＞状態にもかなり立ち入った注釈がほどこされて、書簡の部分が与える独我論的とも言えるパースペクティヴとは好対照をなしている。書簡の部分では一点だった光源が、WII の HL では複数になっているように思われ、そのせいでヴェルターの破滅という筋の進行が、HL で一旦その速度を緩められていると私は感じる。

パースペクティヴの多層化は、WI と WII の HL の冒頭の違いからも窺い知ることができる。HL の書き出しは、WI にあっては次のような簡単なものだった。

Die ausführliche Geschichte der letzten Tage unsers Freundes zu liefern, seh ich mich genötiget seine Briefe durch Erzählung zu unterbrechen, wozu ich den Stoff aus dem Munde Lottens, Albertens, seines Bedienten, und anderer Zeugen gesammelt habe. (MA 276)

「編者」の役割は、あくまでも報告に終始しようとする控えめなものであり、証言者の名前も明言されることで、この控えめさはいっそう補強されているように見える。WII になると、冒頭の部分は 4 倍にふくれ上がる。

Wie sehr wünscht ich, daß uns von den letzten merkwürdigen Tagen unsers Freundes so viel eigenhändige Zeugnisse übrig geblieben wären,

daß ich nicht nötig hätte, die Folge seiner hinterlassenen Briefe durch Erzählung zu unterbrechen.

Ich habe mir angelegen sein lassen, genaue Nachrichten aus dem Munde derer zu sammeln, die von seiner Geschichte wohl unterrichtet sein konnten; sie ist einfach, und es kommen alle Erzählungen davon bis auf wenige Kleinigkeiten miteinander überein; nur über die Sinnesarten der handelnden Personen sind die Meinungen verschieden und die Urteile geteilt.

Was bleibt uns übrig, als dasjenige, was wir mit wiederholter Mühe erfahren können, gewissenhaft zu erzählen, die von dem Abscheidenden hinterlassenen Briefe einzuschalten und das kleinste aufgefundene Blättchen nicht gering zu achten: zumal da es so schwer ist, die eigensten, wahren Triebfedern auch nur einer einzelnen Handlung zu entdecken, wenn sie unter Menschen vorgeht, die nicht von gemeiner Art sind. (HA 92 f.)

「編者」が抛りどころにしている証言者の名が伏せられることで、潜在的に証言者のかずが無限に増大する。証言集めが大変だったという「編者」の発言 (Ich habe mir angelegen sein lassen.../was wir mit Mühe erfahren können) もまた、この臆測に加勢しそうである。報告の質には条件がつけられる。WIにはなかった報告の正確さ (genaue Nachrichten) がことさら述べられるが、それはおのおのの証言に見られる意見の違い (die Meinungen verschieden und die Urteile geteilt) を「編者」自らが調整しているためであるらしい。事件に関わった「人々」の「気質 (Sinnesarten)」に関する見解は一致していないうえに、凡人とは違う人々 (Menschen..., die nicht von gemeiner Art sind) の真意を推しはかるのはとても難しい、と述べる「編者」は、報告の妥当性を一方では弱めると同時に、自分の見解的中率の高さを納得させようとする、こみ入った戦略に出た観がある。「編者」は „Werther“ の〈登場人物〉たちを、多面的に、あるいは相対化したかたちで描き出そうとしているようであり、その結果として、「編者」自身の反省が介在する余地が大きくなる。

「内的独白」の混在と、「編者」の反省行為という役割の付けたしから、私はとりあえず次のような所見を導き出しておきたい。WIのHLのディスク

ールは、直線的にヴェルターの最期を伝えているのに対して、WIIのHLでは、「編者」の反省と判断が優勢を占めるようになり、書簡だけで構成されている部分と著しい対照をなしている。この点を明らかにするために、私はまずHLに見られる＜人物＞評価の差異を集中的に取り上げてみよう。

II.

これから私は、HLに現れるロッテ、アルベルト、ヴェルターの「編者」による描写の違いを、順を追って調べるつもりだが、この作業にはいる前に、断わっておかねばならない点がある。

„Werther“の形式的な特性は、それが書簡体小説であるところにあるが、加えて、この小説のなかでは、手紙の書き手はヴェルターひとりに限定されている。たったこれだけの事実から引き出される帰結は意外に重大であるにもかかわらず、ほとんどの場合、＜研究者＞はこの点を黙殺しているように思える。一人称小説の場合と事情はまったく同じで、読者はあらゆることをヴェルターのパースペクティブから眺める以外に手立てがないのだ。ことを裏返せば、読者はヴェルターの述べていることのすべてに疑いの目をむけることができる。ヴェルターが受取人のヴィルヘルムに書き送るさまざまな出来事が、果たして＜現実＞と一致しているのかどうか、ヴェルターが描き出すロッテやアルベルトの姿が、いったい＜現実＞の彼らと重ね合わされるのかどうかを確証する手立ては、いっさい奪われている。すべては、ヴェルターの頭のなかでつじつまが合うか合わないかというところにだけ委ねられているのだ。そこで当然、ロッテやアルベルトの＜人物像＞を、あたかも実在のまとまった人格であるかのように抽出しようとする身振り、さらにはこのふたりと絡み合うヴェルターの＜姿＞から、ヴェルターという＜人格＞までも引きずり出して、そればかりか中途半端な道徳的な判定まで下そうという身振りは、慎まなくてはいけないはずである⁶⁾。

ところがWIIのHLは、この慎むべきことを逆に促しているように思われる。WIIの「編者」は、好んで＜人物＞たちの＜内面＞を照らし出し、道徳的なコメントを挿しはさむ。私にとっては、この点が、WIとWIIとを評価

するポイントになっている。つまり、書簡だけで構成されている部分にある最小限に絞り込まれたエクリチュールのパースペクティブを「編者」も受け継いでいるか否かによって、作品の効果が大きく変わっていると思われるのだ。

a. Lotte

WIIでは、ヴェルターに対するロッテの＜態度＞の描写をあいまいにすると同時に、それに厚みを持たせるという二重の方策がやはり採られている。ロッテとの約束を破って訪れたヴェルターがオシアンを朗読し、ついにロッテの唇を奪った晩の彼女の心情は、たたみかける疑問文で描かれており、それだけに「編者」はロッテの＜内面＞に立ち入るのを控えているような印象を与える。

War es das Feuer von Werthers Umarmungen, das sie [Lotte] in ihrem Busen fühlte? War es Unwille über seine Verwegenheit? War es eine unmutige Vergleichung ihres gegenwärtigen Zustandes mit jenen Tagen ganz unbefangener, freier Unschuld und sorglosen Zutrauens an sich selbst? (HA 118)

これに対するWIの箇所では、逆にロッテの心持ちはじつに簡潔なかたちではっきりと書かれていた。

Wider ihren [Lottes] Willen fühlte sie tief in ihrer Brust das Feuer von Werthers Umarmungen, ... (MA 293)

ここを見たかぎりでは、WIIの「編者」のほうが節度を守っているように見える。ロッテの＜心情＞に対しては推量がおこなわれて、その当然の帰結として、推量できる要因がいくつか列挙されるわけである。ところが、これに続くWIIの箇所をもう少し読み続けると、事情は大きく変わってくる。

Wie sollte sie ihrem Manne entgegehen, wie ihm eine Szene bekennen, die sie so gut gestehen durfte, und die sie sich doch zu gestehen nicht getraute? Sie hatten so lange gegen einander geschwiegen, und sollte sie die erste sein, die das Stillschweigen bräche und eben zur unrichten Zeit ihrem Gatten eine so unerwartete Entdeckung machte?

Schon fürchtete sie, die bloße Nachricht von Werthers Besuch werde ihm einen unangenehmen Eindruck machen, und nun gar diese unerwartete Katastrophe! Konnte sie wohl hoffen, daß ihr Mann sie ganz im rechten Lichte sehen, ganz ohne Vorurteil aufnehmen würde? Und konnte sie wünschen, daß er in ihrer Seele lesen möchte? Und doch wieder, konnte sie sich verstellen gegen den Mann, vor dem sie immer wie ein kristallhelles Glas offen und frei gestanden und dem sie keine ihrer Empfindungen jemals verheimlicht noch verheimlichen können? Eins und das andre machte ihr Sorgen und setzte sie in Verlegenheit:

(HA 118)

ロッテの胸中がこと細かに記述されている。とりわけ, „Konnte sie wohl hoffen,“ 以下の部分は彼女の内的独白として聞き取ることができる。先ほどの印象とはうって変わって, WIIの「編者」はよほどロッテの<心理>に通じているのである。これは遡って, 最初に引用した三つの疑問文にも影響を与える。「編者」は, 迷っているようでありながらも, じつはロッテの迷いをよくよく知ったうえでそれを描いているのではないか, といった疑いが首をもたげてくる。さらに, 繰り返される疑問文, また反復して用いられている, ‚War es‘ あるいは ‚Konnte sie‘ という書き出しは, この文章に修辭的な技巧という装飾を与えるのに役立っている⁷⁾。「編者」の要求はなかなか欲張ったものになっている。読者は, 事情通である「編者」がおこなう反省につき合うことになり, エクリチュールが生み出すロッテという像にますます意識的に接近していくように仕向けられ, ロッテと一緒にあれこれ迷うことすらできるようになる。その一方で文体は技巧的な身振りを発揮して, 読者は「編者」の文章に美的な快感を覚えるだけの余裕も持たされることになる。ロッテの<内面>は, 読者自身がよく考えられるほどに描き出されており, しかもその一方で, これがロッテの心の動きの直接的な写像ではないことを文彩が知らせている。これは, WIIのHL一般に当てはまる特徴でもある。読者が立ち止まってストーリーを反省してみるだけの時間がぞんぶんに与えられる。

対応するWIの箇所でももちろん「編者」はロッテの<内面>を書きしる

しているが、描きかたは相変らずそっけない。

..... und zugleich stellten sich ihr die Tage ihrer unbefangenen Unschuld, des sorglosen Zutrauens auf sich selbst in doppelter Schöne dar, es ängstigten sie schon zum voraus die Blicke ihres Manns, und seine halb verdrüsslich halb spöttische Fragen, wenn er Werthers Besuch erfahren würde; sie hatte sich nie verstellt, sie hatte nie gelogen, und nun sah sie sich zum erstenmal in der unvermeidlichen Notwendigkeit; der Widerwillen, die Verlegenheit die sie dabei empfand, machte die Schuld in ihren Augen größer, und doch konnte sie den Urheber davon weder hassen, noch sich versprechen, ihn nie wieder zu sehen. Sie weinte bis gegen Morgen, ...

(MA 293 f.)

ここでは「編者」には躊躇もこだわりもない。名詞と動詞が多用された有無を言わせぬ断定調が、さしたる修辭的な技巧もほどこされないままに続いている。これではたしかに、WIの「編者」が報告という節度を守っているかどうかを問いたすわけにもいかず、読者は直接、「編者」のエクリチュールのなかに巻き込まれる。描写の老練さといった点だけを見れば、軍配はWIIに上がりそうだ。それでもなお、WIに見られるこうしたロッテに対する「編者」の距離感の欠如、また読者に対する何らかの配慮の欠如といったものは、先に触れておいた、書簡の部分でのパースペクティブの狭さを思い起こさせるところがあるということを、ここでも指摘しておこう。この点、WIとWIIにおけるロッテという<人物>の描かれかたにも影響を及ぼしている。

とりあえず、引用した箇所が含まれる場面をきっかけにしてそのポイントを引き出してみよう。どちらの版でもロッテはヴェルターへの思いと夫に対する感情が生み出す葛藤のただなかにいるように描かれているが、違いはじゅうぶんに見てとれる。

WIにおけるロッテの葛藤は、もっぱら、燃え上がってしまったヴェルターへの思いとそれを「罪」と感じてどう夫に伝えたものかわからない、といったふたつの要素から成り立っているようだ。彼女はヴェルターを「憎むこ

ともできず」、ヴェルターには二度と会わないと決心することでもできず、夫の「不機嫌と嘲りとが入り混じった」詰問を怖れて明け方まで涙に暮れる。まるで夫がロッテに対する厳格な法廷でもあるかのような書き方である。この調子は、引用に続く箇所でも保たれる。翌朝帰ってきた夫を前にして、ロッテは初めて夫には「耐えられない」と感じ、夕べの取り乱しようを気取られはしないかと「震え」ている。妻の不自然さに気がついた夫は、「非常にそっけなく」なにかあったかと尋ね、それに答えるロッテは「言葉につまり」がちである。夫のそっけなさはまったく変わらず、ロッテはひとり憂鬱さと涙をこらえることになる。

WIIでのロッテの葛藤は、もう少し込み入ったものに仕立て上げられる。アルベルトはここでは、苛責の霊のように一枚岩となってロッテの前に立ちふさがることはないようである。

アルベルトの「機嫌が良くない」(HA 119) 理由は明言されている。「仕事が片付かない」し、相手にしていた「役人は固陋で狭量」だし、行き帰りの道も「悪い」(a. a. O.), 届いている手紙や小包にも「あまり愉快ではないもの」が含まれている (HA 120)。そんなわけで (?) ロッテに対してそっけない態度になったアルベルトのことをロッテはこう思っていると書かれている。

Die Gegenwart des Mannes, den sie liebte und ehrte, hatte einen neuen Eindruck in ihr Herz gemacht. Das Andenken seines Edelmutts, seiner Liebe und Güte hatte ihr Gemüt mehr beruhigt, sie fühlte einen heimlichen Zug, ihm zu folgen, sie nahm ihre Arbeit und ging auf sein Zimmer, wie sie mehr zu tun pflegte. Sie fand ihn beschäftigt, die Pakete zu erbrechen und zu lesen. Einige schienen nicht das Angenehmste zu enthalten. Sie tat einige Fragen an ihn, die er kurz beantwortete, und sich an den Pult stellte, zu schreiben. (HA 119 f.)

ロッテが夫に何がしかの信頼を覚えているように見える文章だ。WIにおけるこれに対応する箇所との違いを見ると、この印象はますます強まる。WIでもまたロッテは „ein unbekannter Zug“ に誘われて夫の後を追うのだが、

「なにかしましょうか」というロッテの問いかけに、アルベルトは“nein!”とだけ答えて背を向ける (MA 294)。WII のアルベルトは、曲がりなりにもロッテと会話を交わしているのである。

さらにまた、ロッテが夫に打ち明けようとしている内容にも大きな違いが認められる。WI のロッテは、昨晚の「罪」を告白することに躊躇しているが、WII のロッテの描写のなかには、「罪」にあたる言葉が見あたらない。「打ち明けてやましいところは何もない」(HA 118)。WII の「編者」はロッテの躊躇にまったく新しい理由をつけ加える。どうやらロッテはヴェルターが自殺に踏み切る可能性をこの段階で察知しているようなのだ (HA 118, 119)。そこでロッテの葛藤は、どうしたらアルベルトとの夫婦関係を維持したままで「破局」(HA 118)を迎えたヴェルターを救えるか、三人の関係をどうすれば回復できるか、という方向にその流れを変える。

Wie schwer lag jetzt, was sie sich in dem Augenblick nicht deutlich machen konnte, die Stockung auf ihr, die sich unter ihnen festgesetzt hatte! So verständige, so gute Menschen fingen wegen gewisser heimlicher Verschiedenheiten unter einander zu schweigen an, jedes dachte seinem Recht und dem Unrechte des andern nach, und die Verhältnisse verwickelten und verhetzten sich dergestalt, daß es unmöglich ward, den Knoten eben in dem kritischen Momente von dem alles abhing, zu lösen. Hätte eine glückliche Vertraulichkeit sie früher wieder einander näher gebracht, wäre Liebe und Nachsicht wechselweise unter ihnen lebendig worden und hätte ihre Herzen aufgeschlossen, vielleicht wäre unser Freund noch zu retten gewesen. (HA 119)

夫婦関係に対する「編者」の ,verständig‘, ,gut‘ という評価語が効果を発揮して、この文章は夫婦が力を合わせて「私たちの友人」⁸⁾を「救う」という信号を発しながら閉じられる。続いてヴェルター自殺の可能性という「特別な事情」が告げられ、それで「いよいよロッテはいま自分を苦しめているこの懸念を夫に伝えにくいと感じた」(a. a. O.)ということになっている。

私はこの改変から、ヴェルターやアルベルトに対するロッテの関係がどう変わったか、そこからロッテの<性格>にどんな変化が現れるか、という性

急な推理に移ろうとは思わない。私にとって必要でもあり、またそれで十分なのは、ロッテの葛藤が WI に比べて WII の方がずっと複雑なものになっていること、また、同じことだが、ロッテ／ヴェルター／アルベルトという三項の絡み合いに、WII では大量の情報が与えられていることを指摘することだけである。このことから、WII の HL におけるストーリー「ロッテ」が＜厚み＞を増したというよりも、読者がヴェルターのみならずロッテに対しても、その＜人格＞について考える比重が大きくなるように仕向けられ、パースペクティブが多層化していると私は考える。

WII の HL でロッテの像が多層化しているという私のテーゼは、これで十分伝わったと思う。さらにいくつかの所見を掲げておくが、これは戦略的な後奏のようなものである。

ロッテの＜心情＞に対する即断を避けて慎重に反省をくり広げる一方で、情報通として反省の結果をさりげなく披露してロッテの＜性格＞に何らかの方向性を与えようという WII の「編者」のディスクールは随所に見受けられる。ロッテはもはやただ単にヴェルターの恋の目的地点ではなく、れっきとした＜登場人物＞になりつつある。次の箇所でも、「編者」はまず慎重さをことさら書き記す。

Was in dieser Zeit in Lottens Seele voring, wie ihre Gesinnungen gegen ihren Mann, gegen ihren unglücklichen Freund gewesen, getrauen wir uns kaum mit Worten auszudrücken, ... (HA 101)

ところがこの慎重な身振りは、すぐさまひとつの方向指示に飜る。「編者」はロッテの「性格」を知っており、読者への共感まで誘う。

..... ob wir uns gleich davon, nach der Kenntnis ihres Charakters, wohl einen stillen Begriff machen können, und eine schöne weibliche Seele sich in die ihrige denken und mit ihr empfinden kann.

Soviel ist gewiß, sie war fest bei sich entschlossen, alles zu tun, um Werthern zu entfernen, und wenn sie zauderte, so war es eine herzliche, freundschaftliche Schonung, weil sie wußte, wie viel es ihm kosten, ja daß es ihm beinahe unmöglich sein würde. (a. a. O.)

gewiß という断定を下しているのは「編者」である。「編者」の巧みな振舞いは、次の改変にも見て取れる。ヴェルターが最後にロッテを訪れた晩の描写は、WI ではやはり何のこだわりもなくロッテの〈心情〉を直接伝える。

..... wie schlug ihr Herz, als sie Werthern die Treppe heraufkommen und außen nach ihr fragen hörte. (MA 283)

WII では「編者」がそれとなく介入してくる。

..... als sie Werthern die Treppe heraufkommen hörte und seinen Tritt, seine Stimme, die nach ihr fragte, bald erkannte. Wie schlug ihr Herz, und wir dürfen fast sagen zum erstenmal, bei seiner Ankunft. (HA 107)

ここで用いられている、本来なら断定を和らげるはずの fast という副詞は、„wir dürfen fast sagen zum erstenmal“ という挿入句のなかではむしろ逆の作用すら持っている。読者の注意は即座に ‚zum erstenmal‘ という情報に向けられて、この一句がロッテの〈内面〉への臆測へと読者を誘いこむ効果を発揮する。情報は明瞭に伝えられるのである。

こうして、WII でのロッテに対する焦点深度は深まり、ロッテは、単なるヴェルターのパースペクティブの消尽点を抜け出して、ひとつの多層化した〈人物〉として運動しはじめる。これは、ヴェルターとアルベルトに対するロッテの関係にも大きく影響する。先ほども触れておいたが、WI でのロッテの葛藤は、ヴェルターに惹かれる思いを軸とした単純なものに見える。WII ではこれに新たな視点が加わってくるが、これに多言を弄する必要はあまりない。

WI では、ロッテに対するアルベルトの冷たさも手伝って、妻としての彼女の立場に対して読者の注意を喚起するような情報はほとんどない。WII のロッテは、「ヴェルターを遠ざけるためには何でもしようとはっきり心に決めて」いる (HA 101)。この決心と、アルベルトに対する信頼とがロッテにより大きな葛藤をひき起こす。ロッテは、ヴェルターに予測される悲劇を現状を維持したままで回避しようという現実的な態度に傾いている。ヴェルター

に惹かれる気持ちをはっきりと悟ったロッテは、WIではそのまま *Melancholie* に捕われるが (MA 282 f.), WI ではその *Melancholie* がパラフレーズされる。

O. hätte sie ihn [Werther] in dem Augenblick zum Bruder umwandeln können, wie glücklich wäre sie gewesen! Hätte sie ihn einer ihrer Freundinnen verheiraten dürfen, hätte sie hoffen können, auch sein Verhältnis gegen Albert ganz wieder herzustellen!

Sie hatte ihre Freundinnen der Reihe nach durchgedacht und fand bei einer jeglichen etwas auszusetzen, fand keine, der sie ihn gegönnt hätte.

Über allen diesen Betrachtungen fühlte sie erst tief, ohne sich es deutlich zu machen, daß ihr herzliches, heimliches Verlangen sei, ihn für sich zu behalten, und sagte sich daneben, daß sie ihn nicht behalten könne, behalten dürfe; ihr reines, schönes, sonst so leichtes und leicht sich helfendes Gemüt empfand den Druck einer Schwermut, dem die Aussicht zum Glück verschlossen ist. Ihr Herz war gepreßt, und eine trübe Wolke lag über ihrem Auge. (HA 106 f.)

いささか滑稽にすら思われるこのロッテの逡巡のなかに、WIにはない情報 がやはり盛り込まれている。ロッテがただ途方に暮れているだけではなく、何とか状況を打開しようと頭を悩ませ、ヴェルターを「救おう」ともしていることが察知される。

ロッテの振舞いにも大きな変化がある。WIのロッテはオシアン朗読の夜の後、朝まで泣き明かす (MA 294)。WIIのロッテは「ほとんど眠らなかった」が、泣いたとは書かれていない (HA 118)。ヴェルターからの使いにピストルを渡したロッテは、WIでは初めてヴェルターの自殺を予感して悩む。テキストには „in dem Zustand des unaussprechlichsten Leidens“ とある (MA 295)。WIIのロッテは、前もってヴェルターの自殺に思い当たっていたにもかかわらず、LeidenはUngewißheitに改められる (HA 120)。この一件で心が乱れたロッテは、WIではたまたま訪れた友人を「放そうとはしなかった」 (MA, a. a. O.) のに、WIIでは友人が「すぐに立ち去ろうとして一留まった」

(HA 120 f.)。WI のロッテが総じて受動的で頼りなく描かれるのに対して、WII のロッテの態度は、意図的にあいまいにされる。このあいまいさがまた、ロッテの多層化にひと役買っていることは、言うまでもなからう。

妻としてロッテの態度にも質的な違いが見られる。WI では、冷たい態度に出るアルベルトにロッテはむしろ翻弄されて、そのせいで窮地に追い込まれるように思われる。アルベルトの「意地の悪いユーモア」がロッテに感染する。

..... so konnte es nicht fehlen daß Lotte zuletzt selbst mit angesteckt wurde, und in eine Art von Schwermut verfiel, ... (MA 276)

天候が悪いのを押してアルベルトが出て行ってしまった時のロッテの心情はこう描かれる。

Lotte, die wohl wußte, daß er dieses Geschäft schon lange verschoben hatte, daß es ihn eine Nacht von Hause halten würde, verstand die Pantomime nur allzu wohl und ward herzlich betrübt darüber. Sie saß in ihrer Einsamkeit, ihr Herz ward weich, sie sah das Vergangene, fühlte all ihren Wert, und Liebe zu ihrem Manne, der nun statt des versprochenen Glücks anfang das Elend ihres Lebens zu machen.

(MA 282)

ロッテは昔のようにアルベルトを信頼しきれない。

..... es ängstigten sie schon zum voraus die Blicke ihres Manns, und seine halb verdrüsslich halb spöttische Fragen, wenn er Werthers Besuch erfahren würde; (MA 293 f.)

WII では、ロッテとアルベルトの関係がWI に比べて円滑なものとして描かれているために、アルベルトに対するロッテの接しかたも変わってくる。

es schwieg ihr Mann ganz über dies Verhältnis wie sie auch immer darüber geschwiegen hatte, und um so mehr war ihr angelegen, ihm durch die Tat zu beweisen, wie ihre Gesinnungen der seinigen wert seien.

(HA 101)

Sie sah sich nun mit dem Mann auf ewig verbunden, dessen Liebe und Treue sie kannte, dem sie von Herzen zugetan war, dessen Ruhe, dessen Zuverlässigkeit recht vom Himmel dazu bestimmt zu sein schien, daß eine wackere Frau das Glück ihres Lebens darauf gründen sollte: sie fühlte, was er ihr und ihren Kindern auf immer sein würde.

(HA 106)

孤独のなかにとり残されて苦しむだけの WI のロッテが、WII では、夫への確かな信頼と、それゆえ妻としての自覚を持った女性として描かれるわけである。

以上の所見をまとめておこう。WII の「編者」は、報告者としての節度を装いながら、ロッテの〈内面〉に関する情報を WI とは比べものにならないほどたくさん与えている。その結果として、WII のロッテの葛藤は、ヴェルターへの想い、ヴェルターを救おうという配慮、夫に対する信頼、妻の自覚、ヴェルターとアルベルトの関係改善のための苦慮、という八面六臂ぶりを発揮する。読者は WI に比べてよりロッテの〈人物〉像に接近するよう仕向けられる。しかしその一方で「編者」は、ロッテに対するひとつひとつの判断に対して熟慮をしているような身振りを示すし、修辞性の補強はストーリーの展開とは異質の美的な効果を上げさえする。こうしてロッテはヴェルターに劣らぬ〈登場人物〉としてその像を結び合わせる運動を示すと同時に、多層化された情報量がロッテの統一したイメージを浮かび上がらせにくくもしているのである。読者はロッテについて「編者」以上にあれこれ考えることになり、WI とは違って HL の焦点をヴェルターのストーリーに絞りがなくなる。

HL に見られるアルベルトの改変は、この所見に新たなアスペクトを加えてくれるはずだ。

b. Albert

アルベルトに対する「編者」の扱いかたの変化には、ロッテに対するのとはやや異なる点がある。WI の HL では、「編者」はアルベルトを描く際にもストレートな書法を変えようとしませんが、WII の「編者」はまたもや、慎重

でまわりくどく、その反面情報だけは大量に与える。ただ、ロッテの場合と違って、「編者」がアルベルトの＜性格＞に対して直接判断を下すという身振りは、WIIではほとんど見られなくなる。両版の冒頭に近い部分を引用しよう。

..... dieser [Albert] liebte sie [Lotte] mit der ruhigen Treue eines rechtschaffnen Manns, und der freundliche Umgang mit ihr subordinierte sich nach und nach seinen Geschäften. (MA 276)

Albert, sagen sie, hatte sich in so kurzer Zeit nicht verändert, er war noch immer derselbige, den Werther so vom Anfang her kannte, so sehr schätzte und ehrte. Er liebte Lotten über alles, er war stolz auf sie und wünschte sie auch von jedermann als das herrlichste Geschöpf anerkannt zu wissen. War es ihm daher zu verdenken, wenn er auch jeden Schein des Verdachtes abzuwenden wünschte, wenn er in dem Augenblicke mit niemand diesen köstlichen Besitz auch auf die unschuldigste Weise zu teilen Lust hatte? (HA 93)

両者の違いは歴然としている。WIIの「編者」は、「人々」が言うことを伝えるだけで、自分自身の判断はさし控えて表向きは公平な身振りを見せる。アルベルトの像も大きく変わる。WIの場合、ロッテに対する愛の深さという要素は顔を出さず、彼は「誠実な夫」なら誰でも示す「穏やかな忠実さ」で妻と「優しくつき合う」、と極めてそっけなく一般的に描かれるのみで、しかもこの愛情も仕事のせいでだんだん後回しになっていく。WIIでは、アルベルトが「何にもまして」ロッテを愛し、ロッテを自慢の種にしていたらしいことが、たとえ伝聞というかたちではあれ公言される。そうなれば、妻に対する態度も変わってくる。私はすでに前節で、WIのアルベルトがロッテに対して冷たいことに触れておいたが、それをはっきりさせておこう。

ロッテに対するWIのアルベルトの態度は、ほとんど容赦がないといった印象すら与える。ヴェルターの話題になるとアルベルトは「ずいぶんそっけない」口調になる(MA 276)。「意地の悪いユーモア」(a. a. O.)を持つアルベルトの「不機嫌さと嘲りとが入り混じった」詰問を恐れるロッテは、「震え」

「取り乱し」、「言葉につまり」がちになる (MA 294)。なにかしましようかというロッテの言葉にはひと言 „nein!“ と答え、ロッテがかかる言葉にも「ほとんどまったく答え」ない (a. a. O.)。妻にピストルを手渡すアルベルトは「とても冷たい」 (a. a. O.)。

こうした表現は WII ではすべて姿を消して、アルベルトの特性描写が消え失せる。さらに興味深いのは、アルベルトの態度に関する描写のうちいくつかがヴェルターの印象になっている点である。WI では冷淡だったアルベルトのヴェルターに対する態度は、WII ではヴェルターの思ったことにすり替えられる (MA 280/HA 103)。次の例でもそれは顕著である。

..... der [Albert] ... seine Frau nach einigen Aufträgen fragte, und als er hörte, sie seien noch nicht ausgerichtet, ihr spitze Reden gab, die Werthern durchs Herz gingen. (MA 280)

..... der [Albert] ... seine Frau nach gewissen Aufträgen fragte und, als er hörte, sie seien noch nicht ausgerichtet, ihr einige Worte sagte die Werthern kalt, ja gar hart vorkamen. (HA 103)

WII の「編者」はヴェルターを媒介させてアルベルトの態度を伝えて、自らは何もコメントしようとしていない。次節で触れることになるが、これは WI から WII におけるヴェルターの改変と連動している。WI では spitz であったアルベルトの口調が、WII では単なるヴェルターの印象に転じることで、ヴェルターの妄想性という＜欠陥＞が補強されるのである。これと同様の改変は、次に引用する箇所でもっと顕著なものになる。まず WI を引こう。

doch fühlte er [Albert] innerlich einen gewissen Widerwillen gegen Werthers Aufmerksamkeiten für Lotten, die ihm zugleich ein Eingriff in seine Rechte und ein stiller Vorwurf zu sein scheinen mußten.

(MA 276)

「権利の侵害」と「暗黙の非難」を感じているのはアルベルト自身である。WII では、これとほとんど同じ言葉が、ヴェルターの「独白」のなかに移し替えられる。

„..... Sieht er [Albert] nicht in meiner Anhänglichkeit an Lotten schon einen Eingriff in seine Rechte, in meiner Aufmerksamkeit für sie einen stillen Vorwurf?“ (HA 94)

アルベルトに対する判断を差し控えて、代りにそれをヴェルターの臆測にするという、同じ書き換えかたである。

アルベルトという<人物>に関する記述はこうして注意深く取り除かれるか、ヴェルターの臆測の産物に作り変えられるが、WIIにおけるロッテがアルベルトに対する信頼を持っているように思われることと考え併せると、次のことが指摘できると私は考えている。

WIにおけるアルベルトの描写は、おもにロッテとヴェルターの関係に対する敵対性という要素としてだけおこなわれているように思われる。いわばWIの<人物>関係は、WIIのような多層性がない分だけ幾可学的に単純で、ロッテとヴェルターは引き合い、これに対してアルベルトが阻害要因となる、といった構図を容易に引き出せる。「編者」のディスクールもそれに見あっている。「編者」はヴェルターの視点をほとんど引き継ぐかたちで、さしたる反省の跡も見せずにロッテとアルベルトという要素にすっぱりと判断を下し、その強引とも言えるディスクールのうちに、読者はエクリチュールの進行を阻害したり遅延させたりする契機を見出すことがない。ところが、WIIでのアルベルトの位置はもっと複雑になる。少なくともロッテの側から見れば、アルベルトとロッテという夫婦の信頼の絆が確保されて、WIの構図にもうひとつ、アルベルトとロッテとが引き合い、ヴェルターが阻害要因になるという別の構図が重ね合わされて、パースペクティヴが複合化することになる。この複合化に伴って、少なくともロッテの<性格>は複雑さを備え、その影響を受けて、「編者」による特性描写を欠くアルベルトに対する推測が働く余地が増しているおかげで、潜在的にアルベルトの<性格>も複雑になる。ロッテとアルベルトとは、WIにおけるような幾可学的な要素の域を脱して、一段と<人格>の位格に接近する。これに対応するように、WIIの「編者」のディスクールは技巧的な身振りをもってエクリチュールの表面に出てきて、あれこれと読者に反省を促す。反省のための情報として、

ヴェルターがおこなう臆測も新たに登場しているが、実はこの臆測は、見事に外れているかも知れないのだ。そうなるとヴェルターの臆測が与える情報は、アルベルトに対する読者の臆測の手続きをいっそう込み入ったものになることになる。そこで、最後に HL におけるヴェルター像の改変に手短かに触れておく必要がある。

c. Werther

WII におけるヴェルターの描写に関しては、従来の＜研究＞がしばしば一定の方向性を巡って展開されてきた経緯を見るなら、今さら詳しく述べるまでもなかろう。議論のほとんどは、ヴェルターの自殺が倫理的に、あるいは社会的に＜正当＞かどうか、彼の行動が＜正常＞か＜病的＞かといった、私から見れば意味のない＜問題＞に集中して展開されている。こうした思考は、エクリチュールが持つミメシスの罠にひっかかったために惹き起こされるのだが、そうは言っても、WII の「編者」はむしろこの誤りを助長しているところがある。

WII の「編者」はヴェルターを道徳的に、しかも否定的に評価する。この点も言い尽された観があるから、私はその特徴を簡単に想起するにとどめたい。「編者」は言う。ヴェルターは ungerecht である。彼の心には Unmut と Unlust がはびこり、精神の Harmonie は破綻し、Hitze と Heftigkeit でかき乱され、widrigst な作用を惹き起こして Ermattung に至る。彼は不幸になればなるほど、ungerecht になる (HA 93)。彼の精神は「混乱」し、「人生に倦み果てて」いる (HA 98)。「編者」はヴェルターの＜心＞の動きに距離をとって、ヴェルターの意見に＜主観的＞というニュアンスをつけることに余念がない。„er fand sich“, „er glaubte“ という表現が目につく (HA 98, 103)。アルベルトの＜態度＞はヴェルターの臆測の産物になる (HA 94, 97, 104)。ヴェルターのモノローグには、ことさら引用符がつけられる (HA 94)。こうして、ungerecht という評価とは無縁な WI の「編者」における直接的なエクリチュールにはまったくなかった Pathographie という特徴に、WII は接近する。付け加えれば、ヴェルターの＜不利＞さは、ロッテがかなり肯定的に評価できる＜性格＞として描かれ、またアルベルトがそうしたロッテに愛さ

れていることから、さらにはまた「編者」のディスクールがこのふたりに加勢しているようにも思えることから、ますます助長される。

自殺に対する書きかたも変わってくる。WIでは、自殺はもともとヴェルターの Lieblingsidee であり、彼はそれを、しっかりした Überzeugung, できるかぎり冷静な Entschlossenheit で着実に決行する (MA 277) つもりだったと書かれている。WIIは、自殺がヴェルターの「憧れ」であったと伝えるが、それに続く情報は変更されて、むしろヴェルターは自殺へと押し流されたように思える記述をおこなう (HA 98)。

私の所見は単純である。WIIにおける「編者」はヴェルターに「不当」という質を与える。読者がヴェルターの〈行動〉を道徳的に反省するようにとでも言わんばかりに、「編者」はヴェルターに対してさながら医師のような距離をとる。ロッセ、アルベルトの〈性格〉が分厚くなった分、この傾向は助長される。ヴェルター、ロッセ、アルベルトの三者は、おのおの独立した〈人格〉になるだけの情報を付与されて、その〈人格〉に対する反省と評定ができるようにエクリチュールが仕組まれる。こうなると、ヴェルターの〈人格〉はいかにも分が悪い。WIの「編者」のディスクールは、ヴェルターに対してもまた、ロッセやアルベルト同様、反省的な距離を介在させるという身振りを示していない。ロッセとアルベルトは、ヴェルターに対する関係項に留まっており、エクリチュールは書簡部分の、つまりヴェルターのそれとの差異をほとんど見せていないのである⁹⁾。

III.

私は前節で、WIIのHLにおける〈人物〉とその関係が、WIに比べて多層化していることを指摘しておいた。パースペクティブが限定されている書簡部分とHLとのディスクールが、WIIでは少なくとも形式上は対照的な関係にあることが推察できるのだが、こうした視点に立ってみると、WIIの書簡部分においてはこの関係を緩和するように仕組まれたとも思える改変を見出すことができる。その点にも少し触れておこう。

まず前節の所見から、次の見解を導き出しておきたい。WIIのHLでは、

ロッテとアルベルトの＜性格＞が多層的に描き出される一方で、ヴェルターに対してはある種の批判的な判断が大きくつけ付わる。そのために、HLは書簡部分に対してある種の反省的な距離を保つという潜在的な機能を帯びてくるように思われる。つまりHLは書簡部分に reflexiv に向き合うわけで、両者のパースペクティヴは異質なものになる。とりわけ「編者」のディスクールは、ヴェルターの＜性格＞に関する「不利」な情報を多く盛り込んでいるために、HLのエクリチュールはこうしたパースペクティヴから書簡部分のヴェルターを吟味する方向に動いているように思える。WIのHLのエクリチュールは、これに対して書簡部分のエクリチュールとの大きな差を生み出すようなディスクールは展開していない。この見解を踏まえて、WIとWIIの書簡部分の異同を見てみたい。

WIIでは、周知のように Bauernbursch に関するエピソードが、かなり長い二通の手紙となって挿入されている。このエピソード自体、„Werther“ 全体の美的構造を reflexiv に多様化する役目を負わされているとも考えられるが、私が注目したいのはヴェルターの報告＜態度＞である。9月4日付の書簡で、ヴェルターは言語表現の難しさを執拗にくり返している。それも、この時点で初めてつき当たった困難としてではなく、„mein altes Lied, ... das ich ewig anstimmen werde“ (HA 78) としてであり、その前ぶれは、やはり Bauernbursch にまつわる第1部5月30日の書簡に、Nein, es sprechen keine Worte die Zartheit aus, die in seinem [des Bauernburschen] ganzen Wesen und Ausdruck war; es ist alles nur plump, was ich wieder vorbringen könnte.“ (HA 13) として顔を出していたものである。ヴェルターはこの不信感に理由すらつけている。

..... ich darf wohl sagen, schwach, schwach hab' ich's erzählt, und vergrößert hab' ich's, indem ich's mit unsern hergebrachten sittlichen Worten vorgetragen habe. (HA 78)

私はここにも、当節流行の言語不信、あるいは＜表出行為＞と＜伝達内容＞との差異という一般化された＜モチーフ＞や＜問題＞を読み取ろうなどと

いう気持ちはない。私はここでもエクリチュールの身振りに目をむけている。ヴェルターは不信を言いながらもなお、自分の伝えることが übertrieben でも verzärtelt でもなく、また自分が伝えている Bauernbursch の人物像が dichterische Erfindung でもないことを主張する (a. a. O.)。ヴェルターはある方法に出て、ヴィルヘルムに自分のディスクールを納得させようとするが、この方法は奇妙なもので、彼は自分とこの Bauernbursch の境遇が似ている点を持ち出してくる。

Könnt' ich dir alles recht sagen, damit du fühltest, wie ich an seinem Schicksale teilnehme, teilnehmen muß! Doch genug, da du auch mein Schicksal kennst, auch mich kennst, so weißt du nur zu wohl, was mich zu allen Unglücklichen, was mich besonders zu diesem Unglücklichen hinzieht. (a. a. O.)

もちろんこれでヴェルターの報告の妥当性を擁護できるはずはない。彼もそういうく立論>をしたわけでもないだろう。むしろこのヴェルターのディスクールは、別な効果を産み出すのに役立っている。自分の言葉には信用はおけない、しかしこの話は本当だ、Bauernbursch とぼくの境遇はこんなに似ているじゃないか、といったかたちで進むヴェルターのエクリチュールは、一挙に主観性>を帯びてしまうのである。エクリチュールの示す身振りは、ヴェルターのディスクールに対して不信の目をむけるように仕組まれている。この身振りのなかでは、„ich bin heute still, indem ich das hinschreibe; du siehst an meiner Hand, daß ich nicht so strudele und sudele wie sonst.“ (HA 79) という但し書きも、逆の効果を産み出しかねないものになる。„wie sonst“ とは何なのか、ほかの書簡を書いているヴェルターは still ではないのか、つまりすこぶる主観的>なものなのか、といった疑念を生じさせるには十分である。やはり HL と同様のことが起きている。読者はヴェルターに対して反省を働かせる機会が増している、しかもヴェルターにとっては不利>に、である。

ところでこの反省を、WII ではヴェルター自身もおこなっている。ヴェルターはしばらく止めていた日記をまたつけ始めて自分の行動をふり返る

(HA 44)。ヴェルターは自分の書いた手紙を読み返す (HA 78)。ヴェルターは Bauernbursch と自分の境遇を照らし合わせて、自分の来し方行く末に思いを巡らす (HA 79)。こうした自省があるいは持っているかも知れない慎重さは、ある意味では「しっかりとした確信」と「冷静な決意」をもって自殺に臨もうとしていた WI のヴェルター (MA 277) にふさわしいもののようにすら思える。自省をそう捉えるなら、Verworrenheit を伝える WII の HL とは折り合いが悪い。ところが、別様に考えることもできる。自省はある意味では単なる<主観>の内部での運動に終始することもある。だとすればヴェルターが自省をおこなうこともまた、ヴェルターが独りよがりな考えに耽っていることを証しているのではないか……？ 私はこうした考察の結果には注目していない。ここでもまた、エクリチュールがそれとなく与える情報が、ヴェルターという<人物>に対するそう簡単には結論が出る見込みもない反省へと読者を促している点が重要なのだ。WII の HL で私が述べていた多層化が、書簡部分でも潜在的なかたちで惹き起こされる。しかも、HL の「編者」がヴェルターの<性格>に関して否定的な評価語を多用するのとは対応して、書簡部分のエクリチュールが伝えるヴェルターという<人物>に対して下しうる評価も、ヴェルターに対しては<不利>になる潜在性を帯びている。こうして、HL が生じさせる反省行為を書簡部分へとフィードバックさせる参照信号が組み込まれて、WII は reflexiv で多層的なパースペクティブを得る。ヴェルターのディスクールは、ロッテ、アルベルト、「編者」、ヴェルターの<性格>の欠陥、という四つの方向から相対化され得るようになっており、エクリチュールの全体は重層的な「叙事性」にすら接近する。

このように見てくると、WII に対して少なくとも構造上の欠陥を云々する謂れはないように思われる。WII の HL におけるエクリチュールが示す身振りは、書簡部分と照合し合う可能性を持っている。両者は相補的な関係になって、形式上はそれほどの齟齬を生じさせないように思える。一方、WI の書簡部分のエクリチュールは、ヴェルターのディスクールとの隔りを示すこともなく、その運動性がまた HL にも引き継がれて、HL のエクリチュールはヴェルターというパースペクティブの消尽点を中心にして、いわば「編

者」がヴェルターのパースペクティヴをそのまま受け継いだかたちで運動しているように思える。そうなれば、WIにも形式的な齟齬は見受けられそうにない。構造上の観点からするかぎり、——それにしてもWIIにおける形式上の配慮がそれで十分なものかどうかは、私には疑問であるが——そこから両版の優劣を云々することには、さほど生産的な議論が期待できるようなには私には思われない。私が目ざしているWIとWIIとの比較に際して中心になるポイントは、くり返し述べているように、両版に見られるパースペクティヴの違いを出発点として展開される。この違いのために、WIが持っている私には思われる決定的な部分を、WIIが破壊してしまっているのだ。

IV.

„Werther“ (もちろんWIIのことである) は、論じられることが非常に多い作品で、ここで私自身の読みを述べるにあたって、今までの〈研究〉が堆積させてきた雑多なロゴスのかずかずをいくらかでも度外視して „Werther“ というエクリチュールに向き合うのは想像以上に困難である。〈研究〉の定石にしたがって在来の論究のうちいくつかを私のディスクールに戦略的に組み込むという手法を、私はけっきょく放棄したが、その最大の理由は „Werther“ 〈研究〉に限らず、おおかたのモノグラフィーがいわゆる「詩的テキスト」の特性を見誤っていると私には思えるからである。とりわけ „Werther“ の場合、〈研究〉のディスクールはエクリチュールが〈指示〉するものを実体的に捉えて、〈人物〉を疑似的なかたちではあれ実情的世界に実在する固有物として定数化するという傾向に、この誤りが現われてくる。先に触れたように、こうした誤りの原因が、〈性格〉を実体化させようとするディスクールが強く働いているWIIの側にもあることは確かだが、エクリチュールの固有な運動性を見失う〈研究〉姿勢が、やはり原因としては先行している。

そこで、あたり前と言われそうなことを、私はあえてまず確認しておきたい。„Werther“ は、その大部分をヴェルターひとりの書簡が構成している小説である。ヴェルターは許婚者のいるロッテに恋をする。ロッテは結婚し、ヴェルターは恋に破れて自殺する。これが „Werther“ のミュトスである。

自殺という要因があるために、このミュトスを完結させるための＜他者＞が介在する必要が生じる。そこで、書簡だけによる構成が最後には放棄されて、「報告」がつけられる。もう一度私は執拗にくり返しておきたい。書簡部分のパースペクティヴは、(それがWIのものであれWIIのものであれ)ヴェルターという一点に集中する単一のものでしかあり得ない。エクリチュールは、ヴェルターが＜誰＞であるかを知らせることもなく、読者を直接ヴェルターのディスクールにただなかに巻き込む。このかぎりにおいて、ヴェルターのディスクールが伝えるロッテ、アルベルト、C…伯爵、B…嬢、またさまざまな事件などは、ヴェルターという関数に対してはその関数項以外のものになることがない。そこでエクリチュールは、関係性を示す運動は記録するが、この運動を観察できるような定点はエクリチュールのなかにもヴェルターのディスクールにも存在しない。こうしたエクリチュールの特性を、WIのHLのエクリチュールはそのまま引き受けている。「編者」のディスクールは、ヴェルターに対するロッテ、アルベルトの関係が示す運動だけを伝える。アルベルトはヴェルター／ロッテという関係に対する敵対項として描かれる。ロッテはアルベルトに対して受動的に描き出されて、この関係を補強する。そのアルベルトはまたロッテに対して敵対的だが、これもまた書簡部分のヴェルターのパースペクティヴを引き継いだものである。

WIIのHLのエクリチュールは、おのおのの関係項に対して大量の情報を与え、場合によってはその情報に一定の方向性を指示することで、書簡部分のパースペクティヴに変更を加える。ロッテとアルベルトは、ヴェルターのパースペクティヴによる特性記述をぬけ出して、新たに「編者」のディスクールによって特定の＜性格＞を具えた＜人物＞として実定され得る潜在力を得る。ヴェルターに対する「編者」の批判的なディスクールもまた、単なるエクリチュールの担い手にすぎなかったヴェルターを、やはり＜性格＞を持つ＜人物＞として実体化する可能性を与える。パースペクティヴは多層化するが、そのうちのどれを選ぶかは、「編者」がディスクールのレベルでしかんに指示を出す。WIでは流動的だった関係性が、ここでは関係項のおのおのが定数として静的に配置され始める。この静的な配置図はひるがえって書

筒部分のヴェルターのディスクールにはね返る。ヴェルターのエクリチュールは一定のディスクールとして相対化され得るようになる。WIIの失敗は、今述べたことのなかにある。

WI全体における単一のパースペクティヴは、恋愛のディスクールが示す特徴的な身振りに酷似しているのである。恋愛における意識は、独特の視野の狭窄を起こす。この意識は、単に自分が愛している者が見せるそぶりや発する言葉のすべてを、単純な解釈装置（あの人は私を愛しているのだろうか）を使って解読しようとするだけではない。時として、この意識を取り巻いている一切の状況に対して何らかの意図、暗示、示唆、象徴を読み取ろうとして、食欲なまでに自分の解釈装置に投げ込んで絶えず意味を生産する。恋愛の意識が持っている判断の基準は、pro か contra か、ja か nein かという単純なものである。この意識は、きわめて単純な二価論理以外のものを知らないのだ。ja に加勢すると思われる要素は、この意識にとってこの上ない味方となり、逆に nein に傾く要素は、すべて自分に対する敵対物と見なされる。ヴェルターがいちど愛したロッテは、何が何でも ja の側にいなければならず、いや、ja の極大値であらねばならず、この選択に立ちはだかるアルベルトは、彼が誰であれ排除すべき nein の以外のなにものでもない。恋愛の意識にとっての意味は、すべてこの単純な二価論理に則って生産される。恋愛の意識は、そもそも＜不当＞なのである。時としてそこには、＜主観＞＜客観＞と呼び習わされるような図式すら作用する場がなくなる。恋愛の意識は、わずかに自分が生産する意味を糧にして自己を維持するに過ぎない。そこで恋愛の意識は、絶えず意味の生産と、願わくば肯定的な意味の増大とを飽くことなく求める。この過程のなかにあって、恋愛の意識は意味全般に対して過敏になって、あらゆる意味を、無意味ですら食欲に摂取し続ける。恋愛のディスクールには、既成の、時としては陳腐としか言いようのない価値表現がさかんに用いられる。「あの人は聖母だ」といちど言葉が発せられれば、「聖母」の属性は無限に飛び出してくる。„Werther“ のエクリチュールには、こうした価値表現が大量にばら撒かれている。あらゆる価値語が、そのコード的なあらゆるコンテクストを外してまでも意識のなかに取り込まれ

て、いっせいに特定の価値に向かう。言語は独特の実体化された価値を帯びてフェティッシュになりおおせて、恋愛の意識が生産し続ける固有の意味系列のなかにつぎつぎにはめ込まれていく。この意味系列、あるいは恋愛の意識にとっては同じことだが、この価値系列には促進的なものと阻害的なもののふたつがあり、またそれしかない。アルベルトは当然後者の系列に投げ込まれる。そうなるとアルベルトという＜対象＞からは、別の意識ならば与えていたかも知れない一切のニュアンスが剥ぎ取られて、ひたすら敵対物としての要因だけが強調される。アルベルトはもはや＜人物＞ではなく、排除すべき障害である。

WIのエクリチュールは、こうした恋愛のディスクールをみごとにミメシスしている。ヴェルターという一点から放たれるだけのパースペクティブのおかげで、このミメシスを妨げるような契機は極力縮減されて、構造は極端に単純になる。ここからミメシスは、その爆発的な力を獲得している。WIのエクリチュールは、ミメシス契機を、いかがわしさとほとんど区別がつかないほどに極大化する。„Werther“には驚くべきテキストが引用されている。HLのなかでヴェルター自殺の顛末を伝える部分 (MA 293-299) には、ケストナーからゲーテに送られた、イェルザレムの自殺に関する報告が、場合によってはほとんど手も加えられないまま引用されているのだ。ケストナーは単にイェルザレムを知っていただけではなく、彼が自殺に使ったピストルを渡した張本人でもある。ピストルを借りたい旨を伝えたイェルザムの伝言まで、わずかな変更をこうむってヴェルターの伝言として „Werther“ に引用されるのだ！ 伝記的な考証は、„Werther“ 成立をめぐるさまざまな論議を戦わせているが、確実な判断を下すにはあまりにもドキュメントは少ない。この議論も、ゲーテに＜人格＞的な憧れを抱く者にとってのみ意味があるのだろうが、私にはまったく興味はない。ゲーテとケストナーの関係がどんなものであれ、引用がケストナーにとってどれほど不快だったかは察するにあまりある。しかしゲーテは無造作にケストナーのテキストを使った。それほどまでにミメシスの力は拡大され、食欲で猥褻なものになっていたのだ。„Werther“ のエクリチュールが恐らくゲーテ自身を直撃

して、その運動のなかに巻き込んでしまったように思える。そうなればゲーテは、恋愛のディスクールのだだなかに身を置くことになる。ミメシスは自分自身の意識のポイエシスに限りなく近づくことになる。

恋愛の意識が持っている単純な二価論理の装置は、＜既成＞の＜秩序＞もまた呑み下す。恋愛の意識の運動のプロセスにとっては、外部から働く一定のルールといったものは存在していない。何らかのルールがこの意識のなかに産出されたとしても、ひとたびそれが意識にとっての阻害要因であると見なされれば、このルールはたやすく捨て去られるか、敵対物として否定的な価値の序列に組み込まれるかのいずれかである。恋愛の意識は、自分でルールを産出する。あるいは、こう言ってもよければ、恋愛の意識にとっては自分だけがルールなのである。恋愛の意識は、自分だけが何としても絶対的な自発性になりおおせようと躍起になる。あらゆる＜既成＞の＜価値システム＞が独自の解釈装置のなかでその意味を変換される。そこで恋愛の意識は、＜社会性＞に対して徹底的に敵対的にもなり得る。恋愛行動は、もともとその排他性のなかに、＜反社会的＞な要素を併せ持っている。ヴェルターのディスクールは＜市民社会＞に敵対する。しかし、これが恋愛のディスクールの必然的な産物である点を見逃したときには、どんな＜解釈＞でも片手落ちになる。

恋愛のディスクールは絶えることを知らない自己記述である。記述される言葉は、すべてフェティッシュとして価値を帯びて、つぎに産み出される記述に対して文法的な拘束力を発揮する。恋愛の意識は自己を再生産するのみで、＜他者＞を知らない。WIのエクリチュールはこれと同じ徴候を示している。ディスクールは、＜主観的＞と呼ぶこともためられるほどに、独我論的に視野を狭める。„Werther“のエクリチュールのなかでは、ロッセもアルベルトも＜他者＞として実定的に＜存在＞してはいない。ロッセの影はうすい。関係のダイナミックスだけが重要になる。エクリチュールはこのダイナミックスに集中して美的切断をおこない、痩せ細る。こうして、„Werther“は直線的な運動性を獲得してその姿を現してくる。ぎりぎりに絞り込まれたこのエクリチュールが、恋愛のディスクールをミメシスすることに成功す

るのだ。

WIIはこの点を見誤った。少なくとも „Werther“ が成立する時点では、芸術はミメーシスという両面価値的な契機から抜け出すことはできなかった。

ミメーシスは、芸術作品の構造契機に四方八方から風穴を開けて＜不純＞にするいっぽうで、芸術が表出するものに対する理解の可能性という通路も同時に保っている。いったい芸術が、このミメーシス契機に代わるものを今後持ち得るのかどうか、私にはわからない。それでも、これだけは確実に言える。芸術の形式的、意味的、機能的な自律という klassisch な要求は、WIの強力なミメーシス契機を別の美的切断によって破壊してしまったのである。

注

- 1) Goethe's Schriften. 8 Bde. 1. Bd. Leiden des jungen Werthers. Leipzig (Göschen) 1787.
- 2) Die Leiden des jungen Werthers. Leipzig (Weygand) 1774.
なお、この初版を収録している主なものを以下に示すが、そのうちで現在でも入手可能なのは i) と ii) だけである。
 - i) Fischer-Lamberg, H. (Hrsg.): Der junge Goethe. Bd. 4. Berlin (de Gruyter) 1968. S. 103-187.
 - ii) Goethe. Sämtliche Werke. Bd. I. 2. (Hrsg. v. G. Sauder.)
 - iii) Faksimile-Druck der Erstausgabe. Leipzig (Insel) 1907.
 - iv) Die Leiden des jungen Werthers. Faksimile-Druck der 1. Ausgabe von 1774 nach dem Handexemplar der Herzogin Anna Amalia. Weimar 1922.
 - v) Goethes Werke. Fest-Ausgabe. Bd. 9. Leipzig 1926.
 - vi) Goethes Werke. Welt-Goethe-Ausgabe. Bd. 16. Mainz u. Leipzig 1938.
 - vii) Werke Goethes. Akademie-Ausgabe. Die Leiden des jungen Werthers. Bd. 1. Berlin 1954.
- 3) 参照に値する論文は、わずかにふたつだけであり、しかも最近のものではない。
 - i) Lauterbach, Martin: Das Verhältnis der zweiten zur ersten Ausgabe von „Werthers Leiden“. Straßburg 1910.
 - ii) Rieß, Gertrud: Die beiden Fassungen von Goethes „Die Leiden des jungen Werthers“. Eine stilpsychologische Untersuchung. Breslau 1924.Lauterbach の記述は、二つの版の異同を整理するに留まるもので、明快な立場はまったく表明していない。これに対して Rieß の論文は、手法に古さがあることは否めないにしても、初版時点と改版当時とのゲーテの様式観の違いを伝記的考察をまじえて裏づけながら、非常に鋭い視点から初版の再評価を迫った画期的な仕事である。私の考察が彼女の仕事から大きな示唆を受けていることを、ここに感謝の意をこめて記

しておきたい。なお、彼女と私の立場上の違いは、注のなかで折に触れて述べてある。

- 4) この点に関して、若干のコメントを述べておきたい。＜研究者＞がおこなう「美的評価」は、昨今特に評判の悪い作業になっているが、それにはもっともな根拠がある。ひとつには、いわゆる＜研究者＞を自称しながらも、芸術がはらんでいる広汎な問題圏には目もくれずに、ひたすら＜専門分野＞の伝承にへばりついて、ついでに評価作業まで借り受けてくる職能集団が振り回している、無思考という大ナタのせいであることは言うまでもない。しかしこの職能集団が産み出す罪禍には、もっと大きなものがある。たいていの場合、個別の作品＜研究＞は、信頼度の高いデータ集積を下敷きにして、極めて＜学術＞的な身振りを見せるが、作品選定の基準を語ろうとはしない。評価とは全く関わっていないようでありながら、実はある種の評価が暗黙の前提になっているという仕組みで、美的評価を不可侵の家宝として守りながら、この前提には絶対に触れさせないという、祝祭的な茶番が演じられているのだ。いずれの場合でも、評価にまつわる困難さは、単に棚上げされるどころか、ほかの職能集団からのもっともな根拠もある攻撃をかわすために、うやうやしく奥つ城に奉納されてしまうのであり、＜評価＞は、ますます非現実的なアウラをたれ流すことになる。

芸術と同様に、美的評価もまた、歴史的に徹底的に媒介された営みである。美的評価の万能装置を形相的に樹立しようとする行為は自己矛盾にすぎないし、この装置の＜自律性＞を前提にした単なる記述作業もまた無意味である。そればかりではなく、美的評価は、ある意味では芸術そのものの在りかた以上にいかがわしいものを具備している。啓蒙の歴史をそっくり輸入し続けている国で、いかがわしさに対するアレルギーが着実に進行していることは、私にも理解はできる。が、小賢しい理論装置が発動できる場所ばかり求めて、その操作に快楽を覚えることと、その装置の作製現場にいて装置そのものに対するほとんど徒勞に近い批判的な思索を巡らすことの、どちらがよりいかがわしいのだろうか。美的評価がまぎれもなくおこなわれている状況を前にして、私は自分自身の評価を、反省を介在させながらディスクールに乗せてみようと思う。私がここでおこなおうとしている評価もちろんまた、評価のための規範を打ち立てるようなつもりでなされたわけではない。しかし、芸術は評価を誘い出す。評価も芸術も、ある意味では新たな媒介のための誘発要因にすぎない。したがって、私の文章は＜学術＞的ではないかもしれないが、私にしてみれば、＜学術論文＞が放ちがちな臭気を発散させるつもりはない。

- 5) „Werther“ からの引用は、WI はすべて Hamburger Ausgabe に、また WII の場合はすべて Münchner Ausgabe (Hanser) に拠っている。引用個所の後にカッコをしてその旨を記してある。(HA 94) とあれば、Hamburber Ausgabe の第6巻 94 ページを、(MA 276) とあれば、Münchner Ausgabe の第1巻第2冊 276 ページを示すといった次第である。
- 6) 残念なこと Rieß もまたこの点では例外ではない。彼女はいちおう文体分析を中心的な手法として使っているが、この手法は＜人物＞の扱いかたと必ずしも連動してはおらず、＜登場人物＞に対して実体的な特性描写をおこなってしまっている。Vgl. Rieß: ibid.
- 7) こうした修辭的な文体の改変に関しては Rieß 前掲書に詳しいので、私はこれ以上立ち入らない。

- 8) ちなみに、この ‚unser Freund‘ という表現が WI では HL の導入部で用いられているだけな点を Rieß は指摘して (Rieß 前掲書, S. 18 f.), これがイタリア旅行後のゲーテに特有の「叙事的な」文体であるとしているが、その是非はともかく、引用された箇所では、‚unser‘ のうちにロッテとアルベルトも含まれるのではないか、という疑念が起きてくることも確かである。この点については、私のスケッチのヴェルターに関する部分 (II-c.) を参照されたい。
- 9) それでは、WII はヴェルターを「不当」と捉えるから「劣って」おり、WI はヴェルターをそう捉えてはいないから「優れて」いるのか、というかたちで両版の評価ができるかと言えば、とんでもない話である。ヴェルターという<人格>が「高尚」であるか否か、あるいは (それが何であれ) <問題性>を孕んでいるかどうかという観点からは、私にとってはまったくどうでも良いことである。IV 節を参照されたい。

付記： このスケッチは、1989 年度に私的な集まりとして北海道大学言語文化部で定期的に行われた『ヴェルター研究会』での討論を発端として書き起こされたものである。熱心に討論に参加して、私がさまざまな発想をするのに有意義な示唆を与えてくださった参加者の方々に、厚く感謝の意を表したい。(1990 年 9 月 29 日)